

平成11年11月20日発行

上智大学英語学科同窓会
東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室発行**Sophia English Language Department Alumni Association****Time and Again**

英語学科教授 George R. Graziano, S.J.



Change has been a persistent companion of mine, so it is no surprise to me, and to those who know me well, that my contract with Sophia University to teach in the English Language Department of the Faculty of Foreign Studies, will be completed and terminated on the thirty-first of March in the year 2000, a.d. At that time, I will have reached, and passed my 70th birthday, since I was born in 昭和五年; and I will have half finished my 45th year of employment at this illustrious institution, since I began my assignment in September of 昭和三十年. Where will I go? What will I do after that? And many other questions come to

mind. Some have already asked me when and where I will perform my *Last Lecture*. Well, at the present time, I haven't given it much thought, since I have no intention of definitively giving a *Last Lecture*. Any *Last Lecture* to be given will be determined by my Maker at the moment of my death, perhaps, since I have no plans to stop teaching as long as I remain in this life.

Neither will there be an immediate change of address for me, since I will continue to rely upon S.J. House to look after my material furnishings after the fateful day. That doesn't mean that I will jump up on a shelf to function as a trinket to collect dust. I intend to take two trips to the eastern coast of Long Island to visit my 92 year-old mother. There will be two trips because I will want to continue to support the Sophia University 体育会ヨット部 in their Spring and Autumn competitions as their 部長 or 顧問 if I continue to remain in good health, as well as to preside over the 関東学生ヨット連盟 as 名誉会長 (old men are preferred for that job). That will begin my new life of freedom.

Then my mind will return to the classroom, but perhaps not to what we now consider to be a classroom. Some of you may have heard me speak of my research projects in preparing language-teaching materials for computers, video equipment, and multi-media. I have finished one program for students to become native speakers of English with a computer equipped with "Native English Teacher" software (my program), a CD player, sound board, and MS Windows95, 98, or NT. I am also putting the finishing touches on another program with the same title for use in a classroom equipped with similar equipment as just mentioned. The software I have finished will first be used with CD-R video disks (now in the process of experimental production). Although I consider the two programs ready for distribution, they are not in their first stages, since I continually find new ways to improve them, so they will continue to develop into future versions. There is also the potential of using the Internet as a medium for their use and development, but we will face that hurdle in due time.

Needless to say, I will continue to look forward to planned and surprise visits from old and new faces to talk over new directions, new projects, skiing, yachting, or cycling, while sipping a cup of coffee from fine beans, or other assorted beverages and delights. The word for today, "Grow old along with me, The best is yet to be, The last of life for which the first was made ..."

George R. Graziano, S.J.

continuing at: graziano@hoffman.cc.sophia.ac.jp

「英語から洪語の世界へ」

糸(旧姓 志水)栄美子 (昭和40年(1965年)卒)



※右側の女性が糸さんです

1966～1968年、後にわかった事ですが、戦後初めてのハンガリーへの公費留学生として、一年間の語学研修のあとブダペスト大学で東欧近代史料の聴講生となりました。当時、ハンガリー滞在の日本人は大使館以外では、雑の鑑別師の方と音楽関係の方だけで10人ほどでした。現在は、500人強の人数となっています。余談ですが、ハンガリーと言う名称は中世西欧の年代記者がフン族と同一と間違え、そのまま使われたもので実際はマジャール民族です。こんなことも、今だから言える事で、当初、洪語はABCからのスタートでしたから、講義など理解出来る訳もなく、恥じと冷や汗の人生が始まることになったのです。上智での4年間の授業の中で恥じを恐れぬ礎が出来ていたことが強みでした。

フリーでマイナー言語に携わる者の宿命かもしれません、その後洪語の何でも屋となり、ほかにわかる人がいないということで、通訳、添乗員、翻訳、語学教師、字幕制作、料理のアシスタントなど恥じを承知で引き受けました。お金を頂きながら、勉強させてもらえた事は幸運でした。洪語の仲間は、何足ものわらじをはいているマルチタイプの人種ですので、貧乏を恐れず助け合い、交流も長続きしています。

1989年の改革以後、日本企業のハンガリー進出に伴い、現地で洪語を学ぶ若い世代も増えたので、冷や汗は彼らに譲り、これからはハンガリーに興味のある人たちのネットワークづくり、ウェブ上の情報提供、文学作品の翻訳などに取り組んでいきたいと思っています。来年は、3年に一度のハンガリー・フェスティバルが開かれ、文学者でもあるゲンツ大統領や作家のエステルハーヅ氏が来日する予定です。4月に東京芸術劇場小ホールで演劇や民族舞踊の公演が予定されています。よかったら、覗いて見てください。

「14年後の近況」

大谷 浩 (昭和61年(1986年)卒)



皆様こんにちは、1986年卒の大谷浩と申します。在学中はESSを中心にSMPやSISの活動にも参加させて頂きました。東京での生活は4年間だけでそれ以外はほとんど地元九州を基盤としています。卒業後は私立高校教諭、予備校講師、米国留学等を経て今年の4月からは国立北九州工業高等専門学校（いわゆる高専。高校5年生＝短大相当まで履修する学校）で英語を教えています。上智とのつながりはたまたに上京して吉田研作先生のSophia Seminar等に参加する程度のものでしたが、数年前吉田先生のメールアドレスを教えて頂いたことがきっかけでSophia BTFというメーリングリストに加えて頂きました。それ以来英語学科のOBOGと通信を交わさなかった日はほとんど一日もありません。その勢いで今年のオールソフィアの集いに当日スタッフとして北九州から飛んでいった程です。

さて仕事ですが、ずっと英語教育に関わってきました。これまで一貫して念頭に置いてきた事はおそらく「卒業した後も英語に対する興味関心が『継続するような』授業をすること」だったと思います。常に大学受験を最大の動機とする生徒を扱ってきた為にこの意識が強かったのだと思います。ところが今年からは英語に対する興味を『持たせる』授業への転換を迫られており、奮闘中です。加えて学会発表や論文書きが仕事の領域に入ってきて、転職慣れしていたつもりの私も意識改革を迫られています。家庭の方は疲れを知らない保育園児（女、男）と疲れてばかりの妻と私の4人で、日夜バトルを繰り返しています。いや、育児は大変です^^;;)。

では、この辺で。北九州へお越しの際は是非お声をかけてください。

メールアドレスは hiroshi@otani.cc です。

英語学科の近況

英語学科長の笠島準一教授(昭和48年卒)に、英語学科の近況や皆さんがかねがね疑問(?)に思っていたことなど、いろいろ語っていただきました。

うわさの真相

団塊の世代の卒業生が集まってよく話すのは「クラス分け」のことです。当時の英語学科は3クラスしかなく、男子クラスが2つ、女子クラスが1つでした。それまで男子校ばかりだった友人は、一生共学クラスで学ぶ機会がなく、不幸な人生を嘆いていました。

団塊の世代を越え、若い世代の人がよく話題にするのも、やはりクラス分けなのです。ただし、これには誤解をしている人が多く、この機会を使って明確にしておきたいと思います。英語学科では、能力別にクラスを分けてはいません。リスニングの試験の結果のみに基づき、3つのグループに分けています。

海外に在住する外国人の場合、リスニングの能力と、英語全体の能力には相関があるといわれます。それは、当然ながら、長く滞在すればするほど英語に接触する時間や機会が増え、それに伴いリスニングもよくなるからです。

しかし、日本で英語を学ぶ場合、長い間学習を続けても、適切なリスニングの機会と指導がないため、英語の能力とリスニングの能力との相関は生まれません。

大切なことは、一般的な日本の英語教育では、英語能力とリスニング能力とは、別に考えるべきなのです。

ところで、ご存知のように、英語学科には長年海外に滞在し、映画の英語も、歌の歌詞も聞き取れる学生もいる反面、ネイティブスピーカーと話したこともない学生も入学しています。もし皆さんが外国人に日本語を教える場合のことを想像すると、この差は教える上で大変なことがおわかりと思います。

そこで、英語学科は、リスニングのテストで、特によく聞こえる25% (A,Bクラス)、次に聞こえる25% (C,D)、そして一般的な50% (E,F,G,H) とグループ分けをします。A,Bの間、C,Dの間、E,F,G,Hの間の違いは、全くありません。

このクラス分けは、聞き取りの差が大きい1年次で、特に外国人の先生が担当するスキルのクラスのためだけです。1年次の他のクラス、および2年次以降は意味を失います。在校生を見ても、卒業生を見ても、どのクラスがよいということは全く言えません。

以上のように、英語学科では英語の能力別にクラス編成はしていないこと、ただし、1年次の、特にスキルのクラスのために、リスニングの得点だけで3つのグループに分けていることをご承知いただければと思

い、この機を借りて、説明しました。どの学生も、英語の能力に関しては、英語学科に入学しただけあって、抜群の能力を有していることは言うまでもありません。

上智の広末涼子

上智の入試制度は一部変わりました。最も大きな変化は公募制の推薦入試です。以前、早稲田大学に自己推薦で入学したタレントの話題がマスコミで沸騰していましたが、上智にも同様の公募制の推薦入学システムがあるのです。2年前から始まったばかりですから、初耳の人が多くでしょう。

英語学科が求めている応募の要件は、高校での評定平均4.3以上、ただし英語は4.5以上、その他、英語の検定試験で、TOEFLなら520以上、英検なら準1級以上などを取得していれば応募できます。ある課題についてのレポートを日本語で書いて提出の上、英文解釈、リスニングコンプリヘンション、英作文の3つの学科試験を受け、面接で決まります。1999年度は募集人数25名のところ、56名が応募、41名が合格しました。この制度が知れ渡るにつれ、今後、応募者は増えることが予想されます。

全員お引き受けします

指定校推薦も少し変わりました。これまでの推薦入学で、受験生は試験を受け、何倍かの競争をして合格していたのです。時々高校の先生から、推薦入学は学校が責任を持って推薦しているのに、試験を受けさせて、しかも落第させるとはひどいではないか、との苦言も届いていました。でも、2年前から始まった指定校制の推薦入学では、推薦された受験生は全員合格となります。1999年度は11名応募し、11名全員が合格しました。

その他、外国学校出身者入試、いわゆる帰国子女入試も9月と2月に行われています。これらは特別入試として上智大学の入試資料に記されていますので、もし機会がありましたら注意してお読みください。英語学科は卒業して、英語学科はよかったと、心から思ってもらえる学科にするため、常に配慮をしています。卒業生の方々からのご協力もよろしくお願いいたします。

卒業生短信

● 8月末までに事務局に届いたお便りを掲載いたします。(本文中では敬称を略しております。)

選暦も半ば近くになり、未だに時々学生時代の夢を見ます。期末テストやホームワークに追われ、苦勞する当時を思い出し、しばし、若かりし頃の真摯で一途な青春時代の、今では良き学生時代を思い出しては、苦笑を禁じ得ない今日この頃です。

“一日は長く、一年は短し”が偽らざる現在の心境です。さて、私事ではございますが、このたび2冊目となる「カウンセリング販売テクニック」を自費出版しました。ボケない余生を送るため、日々のモットーとして、「カ(感激)、キ(気楽=リラックス)、ク(工夫)、ケ(健康)、コ(好奇心)」人生を享受しています。

嵯峨山 雄也 (昭和34年卒)

昭和45年(1970年)に英語学科を卒業して30年目に入ります。伊藤忠に入社し、食品駐在員としてロサンゼルス支店に勤務、Harvard Business School Executive Program でボストンで久しぶりの学生生活とアメリカ生活を公私共々十分enjoyしました。直近の2年間、東北支社長として、東北の経済界プラス大自然、歴史、祭りにも触れることができました。この6月に子会社の冷凍食品メーカーであるヤヨイ食品(本社 清水市)に社長として転出します。21世紀に向け、同社を日本を代表する世界的な食品メーカーに育て上げることが、大事な使命となります。

英語学科の御発展と在校生、OBの御多幸と御健勝を祈っております。

奥脇 裕 (昭和45年卒)

昨年(2022年)の12月に、大分県佐伯市にある内科病院に、主人と共に内科医として就職しました。大分県南に位置し、東京での暮らしが嘘のように、自然に囲まれ、気候も穏やかな佐伯ですが、魚介類が新鮮で、宮崎にも近く、子供のためには良いかもしれません。ただ、文化施設が少なく、好きなジャズのライブにも行けないこと、また、友人がいなことが最大の悩みです。寂しくなると、東京や大阪、福岡等の友人に電話をかけて長電話をさせていただきます。

私を覚えて下さっている方、メールをお待ちしています。

(otuka715@lime.ocn.ne.jp)

大塚 (旧姓 大慈弥) 由美 (昭和60年卒)

在学中は準硬式野球部に所属し、野球に明け暮れました。44年(45年?)の大学紛争時にもロックアウトを幸いと、野球とアルバイトに精を出しました。大学でやり残したのは英語の勉強であり、今英語の教員をしているのもそのせいかと考える近頃です。福島県高校英語部会の県大会が郡山市で昨年開かれた折、同級生の吉田研作教授を招いて、How to make classroom communicative というタイトルで公演をいただきました。大変好評で、私も面目をほどこした思いです。改めて感謝します。

変革期にさしかかった英語教育ですが、SELDAAやASTEを通じ、母校の情報を最大限に生かしながら、少

しでも目の前の生徒に力をつけ、できるだけ多くの生徒たちを母校に送りたいと考えております。今後ともどうぞよろしく。

佐久間 公民 (昭和47年卒)

昨年8月より米国マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード大学国際問題研究所に研究員として在籍し、アジア太平洋の国際関係や安全保障政策について研究を行なっております。当研究所には世界中から研究者が来ているほか、大学院の学生等とも議論をする機会も多く、上智で学んだ英語学、アメリカ研究、国際関係論の知識、教養が大変役立っています。

なお、川口和子教授も当大学のライシャワー研究所に来ておられます。

松井 一彦 (昭和58年卒)

もう52歳になってしまいました。10年前から職住接近で、夕方は明るい中から歩いて35分の家に帰っています。朝夕ゆっくりと本を読んだり片づけをしたり、時間があるしあわせを楽しんでいます。休日にはテニスボールを追って走り回っています。いつまで続くか、健康のありがたさを感じる今日この頃です。

子供2人が大学生で、30年前の私の学生時代とは世の中も変わりました!

木村 康 (昭和45年卒)

悲しい近況です。7月に突然、上の娘を失いました。ただぼう然と過ぎた葬儀でしたが、69-52クラスの同級生が忙しい中、何人も駆けつけてくれました。ショック状態で、涙も出ない私に代わって、亡き娘を知る同級生達が涙して下さり、私は大きな支えを感じる事ができました。神からの救いの使者のような友達がいるかぎり、この辛さを私は乗り越えられると思います。

門多 (旧姓 曾根) 三恵子 (昭和48年卒)

70-50, 51, 52の皆さんへ

卒業以来25年ぶりにオールソフィアンズデーに参加しました。今年是我々の銀祝の年にあたっているのです。今回参加しないと次は金祝でそれまで生きてるかどうかわからないので、お祝いしてもらえるのは最後かもしれないと思って参加しました。久しぶりに会った我が友人共はそれぞれにこれまでの人生を顔に刻んでおりました。幸いだったのは皆がそれなりに幸福な人生を送って来たように見えた事でした。

25年の歳月を越えて青春の友は良いものだとの想いを強くしました。これからはたまには会いたいものだと思ったのも束の間で、大阪へ帰った途端仕事に忙殺されておりますが、そろそろいい年になって来た事でもあり何とか時間を作って、本当にこれからはたまには会うぞと決意を新たにしている今日この頃です。東京在住の方、今度は英語学科の同窓会を開いて下さい。

また会いましょう。それまで元気で。

金子 雄一 (昭和49年卒)

SELDA 女性セミナー

女性セミナーでは、毎月一回学内外から講師をお招きして、それぞれご専門の分野の講演をしていただいております。

今年度、これまでに開催されたセミナー

◆1999年4月28日(水)

丹野真氏 (上智大学外国語学部英語学科教授、昭和45年英語学科卒)

『カントリーとアメリカの女性；アメリカの主婦と働く女性の歌』

アメリカの文化と生活の中に脈々と紡がれてきたカントリーソング——貧しさの中にも誇りを持ち、強い絆で結ばれた家族の姿が浮き彫りにされてきます。そんな歌を次々にギターの弾き語りで聴かせていただきました。

◆1999年5月26日(水)

江畑謙介氏 (軍事評論家、昭和48年上智大学理工学部機械工学科卒)

『21世紀の安全保障 — 「周辺事態」だけでない安全保障の考え方—』

冷戦後、国家概念が希薄化し、国の集合である国連が無力化してきていること。従って、安全保障の概念も変化してきていること。軍事力の最大の目的は抑止力であるが、安全保障は軍事のみではなくいろいろな面があることなど、21世紀の安全保障について大いに考えさせられました。



◆1999年6月23日(水)

Ms. Kit Pancoast Nagamura (Dr. of Literature / Editor of Kodansha)

『DISHRAGS INTO DIAMONDS ; The Alchemy of Modern Poetry』

『詩』は日常から離れた遠い世界のものではなく、生活の中にある言葉のイメージを広げていく中からも生まれるものであるということを、現代アメリカの女流詩人の作品を通してわかりやすくお話いただきました。

◆1999年7月14日(水)

谷口由美子氏 (翻訳家)

『サウンド・オブ・ミュージックの世界』

ヴァーモント州ストウにある “Trapp Family Lodge” を訪問されたときのスライドを見せていただきながら、アメリカに渡ったトラップファミリーのメンバーのその後を語っていただきました。

◆1999年9月22日(水)

ビデオ鑑賞 オルブライト 国務長官来校記念講演

『国際社会における日本の役割』

◆1999年10月27日(水)

Prof. John Clammer (上智大学比較文化学部教授)

『Understanding Southeast Asia : Cultural Crossroads Between East and West』

今後の予定

時間：10:30～12:00

場所：ソフィアンズ・クラブ

◆1999年11月24日(水)

猪口邦子氏 (上智大学法学部教授、法学部国際関係学学科長)

『最近の国際情勢と日本の課題』

◆1999年12月8日(水)

井上久美氏 (上智大学外国語学部英語学科教授)

『Experience is a brutal teacher …』

英国でのサバティカル——サバイバルを終えて』

——女性セミナーよりお知らせ——

4月より女性セミナーはソフィアンズクラブで開かれています。従来のかつらぎ館からもう少し足を先に伸ばしてください。

1回毎の参加費：500円

年会費：英語学科卒業生は3,000円

英語学科卒業生以外は5,000円

——女性セミナーよりちょっと一言——

SELDAA女性セミナーは、女性のためだけのものではありません。知的興味をお持ちの卒業生の方なら、老若男女を問いません。

男性の方も大歓迎です！

連絡先：[世話人]

日岡久美子(49年卒) 03-3775-8988

渡辺まかや(49年卒) 045-361-4221

会 計：三好比呂子(49年卒) 03-3348-0285

<編集担当より>

前号のSELDAA会報No.28のこの欄におきまして、4月28日の丹野先生の演題を誤って掲載してしまいました。この場をお借りして、丹野先生並びに関係者の皆様にお詫びいたします。

1999年度定例総会報告

1999年度SELDAA定例総会が、今年もオール・ソフィアンズ・デーにあわせて5月30日(日)正午より、上智大学1-101教室にて開催されました。冒頭、議長に石川雅弥常任委員(昭和40年卒)、書記に岡村リサ常任委員(昭和56年卒)を選出しました。

【活動報告】

蔵田實会長(昭和48年卒)の挨拶の後、以下の通り、前年度の活動報告等が行われました。

- 1) 池沢なるみ副会長(昭和48年卒)より全般的な活動報告
- 2) 笠島準一 英語学学科長(昭和48年卒)から、寄付講座について—これまで寄付講座で行われてきたディベート講座が、大学の正式な講義となったため、同窓会からの支出をお願いしなくてもすむようになった。
- 3) 大日方聖信事務局長(昭和62年卒)から、会報編集について
- 4) 安西徳子常任委員から、女性セミナーについて—このセミナーは女性だけを対象にしたものではないので、「女性セミナー」という名称を変更したいと考えている。
- 5) 大日方聖信事務局長(昭和62年卒)から、1998年度決算報告について

【1999年度予算案】

1999年度予算案について、大日方聖信事務局長(昭和62年卒)から説明がありました。審議の結果、1998年度予算案は、満場一致で承認されました。

【懇親会】

総会終了後、懇親会が行われました。30名ほどが参加し、母校での和やかなひと時を楽しみました。

1998年度 上智大学英語学科同窓会収支決算書

自1998年4月1日 至 1999年3月31日

収入額 20,895,465円

収支額 3,276,707円

次年度繰越金 17,618,758円 (単位：円)

	科目	予算	決算	備考
収入	1 繰越金	15,245,993	15,245,993	
	2 会費	2,000,000	5,634,880	永久会員 213人
	3 受取利息	10,000	14,592	普通預金・郵便貯金・債券
	合計	17,255,993	20,895,465	
支出	1 名簿作成積立金	600,000	600,000	
	2 会報費	2,210,000	2,232,261	編集・印刷料 1,212,270 (税込み) 郵送料 921,580 (切手) 発送料 98,411 (封入・届出し)
	3 女性セミナー	230,000	230,000	
	4 寄付講座	200,000	0	
	5 交流促進費	200,000	8,889	
	6 総会費	100,000	70,047	資料作成費・懇親会
	7 会議費	100,000	56,200	常任委員会運営費
	8 事務処理費	150,000	79,310	文書代・通信費・振り込み手数料・消耗品費等
	9 予備費	13,465,993	0	
	合計	17,255,993	3,276,707	
			17,618,758	1999年度に繰越(※1)

1999年度 上智大学英語学科同窓会予算

自1998年4月1日 至 2000年3月31日 (単位：円)

	科目	予算	備考
収入	1 繰越金	17,618,758	1999年度より繰越
	2 会費	2,000,000	入会金を含む
	3 受取利息	10,000	普通預金・郵便貯金・債券
	合計	19,628,758	
支出	1 名簿作成積立金	600,000	2000年度(2001年3月)発行予定
	2 会報費	2,500,000	会報28・29号分
	3 女性セミナー	230,000	講師への謝礼・交通費、会議室利用料
	5 交流促進費	200,000	ホームページ作成等
	6 総会費	100,000	資料作成費・懇親会
	7 会議費	100,000	常任委員会
	8 事務処理費	150,000	文書代・通信費・振込手数料等・消耗品費
	9 予備費	15,748,758	
	合計	19,628,758	

■異動通知にご協力ください

ご住所、勤務先などに変更があった方、名簿の誤りを訂正される方、お名前の正しい読み方を知らせてくださる方は、英語学科同窓会事務局またはソフィア会事務局までお知らせください。また、住所不明の方が多数いらっしゃいます。消息をご存知の方、情報をお寄せください。皆様のご協力をお願い申し上げます。

■SELDAAより、募集とお知らせ

◆SELDAAでは、皆様よりこの会報に載せる記事を募集しています。近況や最近感じたことなど、何でも結構です。原稿に写真を添えて、あるいは、同封の葉書にご記入の上、お送りください。

◆この同窓会の常任委員として手伝ってくださる方を募集しております。ボランティアで私達と一緒に会を盛り上げてくださる方、ご連絡をお待ちしています。

上記に関するご応募・お問い合わせは、お気軽にどうぞ。

連絡先: 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 英語学科事務室気付 上智大学英語学科同窓会事務局

TEL.03-3238-3719 FAX.03-3238-3910

E-mail:seldaa@mve.biglobe.ne.jp

■会費納入のお知らせ

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費の納入によって賄われています。同窓会活動のより一層の充実と活性化を図るために、ぜひ会費をお支払い下さいますようお願い申し上げます。

会費の支払方法には、毎年会費を支払う「一般会員」と、一括払いの「終身会員」の2通りがあります。初めて会費をお支払いになる際には入会金も合わせてお支払い願います。金額は下記の通りです。同封の振替用紙にて最寄りの郵便局または銀行よりお支払いください。その際、ソフィア会会員番号を必ずご記入ください。(なお、振込用紙は、発送の都合上すべての方に送っておりますので、ご了承ください。)

入会金 : 1,000円

一般会員 : 年会費 2,000円 (できれば3年分まとめて)

終身会員 : 一括払い 20,000円

《あなたの会費納入状況》

封筒の宛名ラベルの右上をご覧ください。

◆「S」のスタンプが押してあるのは、「終身会員」であることを示しています。

◆「未」のスタンプが押してあるのは、今年度の会費が未納になっていることを示します。

6,000人を超える同窓会会員の会費納入状況のチェックには多大な手間と時間がかかります。チェックの時期と納入の時期が重なったなどのために行き違いがあった場合は何卒ご容赦ください。

◆ SELDAA 常任委員 (平成11年10月現在) ◆

■名誉会長/笠島 準一 (昭和48年卒)

■女性セミナー/安西 徳子 (昭和49年卒)

■会 長/蔵田 實(昭和48年卒)

■常任委員/石川雅弥(昭和40年卒) 斎藤敬子(昭和48年卒)

■副会長・事務局長/大日方聖信(昭和62年卒)

相馬晶夫(昭和54年卒) 増田 光(昭和59年卒)

■副 会 長/池沢なるみ(昭和48年卒)

東郷公德(昭和62年卒) 栗村 真(平成4年卒)

■会 計/内藤恭子(昭和55年卒)

寺北ゆかり(昭和61年卒)

■会 報/佐藤誠一郎(昭和53年卒)

■監 査/井坂由美子(昭和47年卒) 岩村礼子(昭和49年卒)

《編集後記》●笠島先生の「クラス分け」の説明には、長年の疑問が氷解した方も多かったのではないのでしょうか。

●最近、卒業生短信の数が減少気味です。日々のちょっとした感想でも構いませんし、近況報告でも結構です。ご自身の著作物やホームページの宣伝もOKです。皆様のご投稿をお待ちしています。